

2020年1月31日

2019年度聖路加国際大学大学院課題研究論文

子ども立ち会い分娩における
意思決定の現状と情報ニーズ

The current state of mother's information needs
and decision making for sibling-attended birth

18MW007

今野 佳奈

要旨

目的：母親とその家族が、第2子以降の出産に際し、上の子どもの立ち会いの有無を決定できるように支援することは、新しい家族の誕生を支える助産師の役割として重要である。そこで、本研究では、子ども立ち会い分娩の実態を調査する。これにより、上の子の立ち会いの検討に活用できる情報提供ツールの開発に繋げることを目指す。

方法：インタビュー調査に基づく質的記述的研究である。データは、半構造的面接法により収集した。データの分析は、ベレルソンの内容分析法を参考に、質的帰納的に実施した。分析の主題を4つ置き、対応する9つの問いを設定した後、問いに答える部分をそれぞれ逐語録から抜き出し、1つの記録単位（コード）とした。記録単位をカテゴリ化した後、コード数を算出し、全体に占める割合を算出した。なお、本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の審査を経て実施した（承認番号：19-A053）。

結果：分娩から1年以内の2経産以上の女性18名にインタビューを実施した。ほとんどの母親（83.3%）は、子どもが3歳以下の場合を除き、子どもの立ち会いについて検討していた。母親たちが参考にしてきた情報源の93.3%は【ネット・メディアの情報】、【身近な人の体験談】であり、専門職に相談した者はいなかった。55.6%の母親は「必要な情報が得られなかった」と捉えており、得られなかった情報としては、【子どもへの影響】、【母親自身の感想】が84.3%を占めていた。立ち会いを希望して実施できた家族と、実施できなかった家族の違いは【上の子の明確な希望】の有無であり、立ち会った母親全員は、妊娠期に何らかの事前準備を行い、立ち会い時には夫の協力を得ていた。母子双方が立ち会いを希望していた場合、母親は立ち会いに満足し、子どもは肯定的な反応を示した。しかし、母親が立ち会い分娩を嫌だという気持ちがある場合、母親は立ち会いに後悔し、上の子ども分娩に否定的な反応を示した発言が認められた。また、分娩に立ち会った子どもには、立ち会わなかった子どもにみられる、弟妹を避ける行動やライバル視する行動が認められなかった。弟妹への関心は、立ち会いの有無に関わらず、どちらの子どもにおいても高かった。

結論：母親の希望、父親の立ち会いへの同意、上の子の明確な意思、これらが揃っていることが、子ども立ち会い分娩の実施可能性を高め、立ち会いの満足度を高める上で重要であると示唆された。また、妊娠期から事前準備を家族で行うことで、立ち会いがスムーズに行われ、子どもの反応も良いものが得られやすい傾向があった。妊娠期に母親と関わる機会を持つ助産師が、十分な情報提供を含めて意思決定を支援することが求められる。